

一線記者分析会議

特集

統一地方 大反省会

衆院選 はどうなる

プラス

出席者

A = 全国紙記者
 B = 地方紙デスク
 C = 民放TVデスク
 D = 雑誌記者
 司会 = 本誌編集部

4年に一度の統一地方選。北海道で起こった「現象」を見出し風に並べると、次のようになる。

- *現状維持の中 変化の「芽」も
- *道知事、札幌市長選は現職が圧勝
- *全国的に伸長の維新 道議会、札幌市議会で議席確保
- *凋落目立つ民主系 立て直し急務
- *函館市長選は新人大泉が地滑りの大勝

今回の地方選を記者4人が振り返るとともに、年内に行われる可能性が高い次期衆院選への影響などを展望してもらった。

*カット写真は、いずれもTV画面より (4月27日現在、文中敬称略)

4年に一度の政治決戦、統一地方選が終わった。前半戦の北海道知事選では現職鈴木直道氏が野党統一候補にトリプルスコア以上の大差をつけて再選。札幌市長選も現職秋元克広氏が危なげなく3選を決めた。道議選や札幌市議選では自公両党が手堅さを見せる中、全国政党へ脱皮を図る

維新が初の議席を確保。道内進出を果たした。一方、目立ったのはかつて「王国」とさえ言われた民主系の凋落だ。後半戦の函館市長選で立憲民主党が支持した大泉潤氏が自公推薦の現職を破って一矢報いたが、これとて多選批判の風に乗ったからに他ならない。立て直しが急務だ。

まるで「消化試合」

知事選は盛り上がりなかったね。

A 鈴木は現職2選目。ただでさえ勢いがあるのに、立憲が担いだ池田真紀は知名度不足に加え準備不足。まるで「消化試合」。投票率が51・7%と過去最低だったのも当然だ。

B 告示日夕方の道内民放ニュースが象徴的だった。トップは大谷翔平らが活躍したWBBC、次は札幌苗穂「開かずの踏切」の廃止。知事選はその後の3番目。知事選への関心の薄さを物語っていた。

C すべての責任は立

憲にある。前回、鈴木に負けてから4年間、準備を怠ってきた。昨年未から北海道に縁のある官僚らを口説いたが断られ続け、元衆院議員で浪人中の池田にたどり着いたのは告示まで2ヵ月を切った時点。まともな勝負ができるはずはない。

立憲の候補者選び難航は毎度のこと。もう「風物詩」だ。

D 今回は特にひどい。公約がやつと告示日間に合ったほど。「野党共闘」で全国唯一の

与野党対決と銘打ったが、実態はバラバラ。「野党第一党として候補を立てた」というアリバイにしか映らなかった。

3倍以上の大差で敗退は屈辱的だ。立憲も反省するのでは…。

C どうか。立憲道連代表の逢坂誠二は敗戦直後「野党がまとまり、できる限りのことはやれた」と他人事のように話していたから

D 最後は「タマが悪い」ってことか。責任逃れだな。

鈴木 の 得票率 歴代最高

— それにしても鈴木は強かった。

B 低投票率の中、179市町村で全勝し、前回より7万票積み上

げた。得票率は歴代最高の75%。前回、候補選考で自民党や経済界に生まれたしこりは完全に消えた。強ければ、



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)